

# 南勢牛鬼太鼓保存会

南伊勢町五ヶ所浦に語り継がれる民話の一つ「牛鬼」は、首から上は牛の頭、そして人間のようにものを言う鬼のこと。一日に千里も走る神通力を持つ強い鬼だと伝わっています。その伝説をもとにした「南勢牛鬼まつり」は、南伊勢町の漁業や農林業の復興とまちの活性化を願ってはじめられました。そのときに結成されたのが「南勢牛鬼太鼓」です。



代表 上野 元康さん

## お問い合わせ

「南勢牛鬼太鼓保存会」  
 度会郡南伊勢町船越 1781-7  
 TEL 090-1272-3752  
 (代表 上野 元康さん)

「愛洲の里」の牛鬼像やマンホールにも牛鬼が描かれるほど、南伊勢町の人々に馴染みある存在の「牛鬼」。その姿を彷彿とさせるお面で演奏するのが「南勢牛鬼太鼓」です。代表の上野 元康さんに活動について、お話を伺いました。

——太鼓チームができたのはいつでしょうか。

上野：昭和60(1985)年に、南伊勢町(旧南勢町)が町制施行30周年を記念して、数々の催しを行いました。そのうちの一つが牛鬼伝説をもとに創作された「南勢牛鬼まつり」。それをきっかけに、太鼓のチームができました。

——オリジナル曲も地域の発展を願ったものですね。

上野：創作民話「南勢の牛鬼さま」をベースに、「海神太鼓」「牛鬼太鼓」「合体太鼓」の3曲で構成されていて、海の民と山の民が力を合わせることで町が栄えていくというのがテーマです。「海神太鼓」は大漁旗をはためかせた漁船をイメージし、大漁と安全を祈願して演奏し、「牛鬼太鼓」は笛の音につられ山から神が降りてきて、辻々で太鼓を叩いて厄を祓い、農林業の振興や豊作、家内安全を祈って演奏します。クライマックスとなる「合体太鼓」は、牛鬼の踊りも交え、町の発展を祈って力強く豪快に打ち鳴らします。

——鬼の面が大きくて、とても迫力があります。

上野：お面に空けられているのは目と鼻の小さな穴だけです。見えるのが目の前だけで、横の状態もわかりません。視野が狭くなるので、踊りのときに舞台上でぶつからないよう、非常に気を遣いながら演奏します。お面をかぶるのは2人でも十分迫力はあるのですが、最高4人まで。「鬼の面が出てくるのをやって」と、リクエストも多いんです。

——各地の演奏会にひっぱりだこですね。

上野：結成当時、町役場の担当部署に、マネージャーのように、積極的に売り込んでくれる方がいたので、あちこちに出かける機会がありました。また平成6

(1994)年の「まつり博三重(世界祝祭博覧会)」で、千人太鼓をやろうと県内の太鼓チームが集まりました。作曲家は林英哲(はしづね)さんで、4月から練習が始まり、お盆に本番。千人同時に太鼓を叩いて合わせるのは大変でしたが、そのときの経験で多くの太鼓チームとも知り合いになりました。一年を通してイベントや祭りに呼んでいただき、多い時は週に6〜7回も出演していました。恒例だったのは、伊勢の高柳の夜店、松阪の「祇園まつり」や「氏郷まつり」、10月の「津まつり」の日は「伊勢まつり」と掛け持ちで、時間をずらして参加させてもらっていました。

——上野さん自身が太鼓をはじめたきっかけは。

上野：若い時にやっていたバンドでドラム担当でしたから、自然と太鼓を。曲を覚えるのは苦になりませんが、和太鼓とドラムは似て非なるものがあります。叩くうちにこちらが面白くなり、太鼓を購入して学校や保育園に指導に行ったり、教室もいくつか受け持っています。子どもたちを飽きさせないように工夫しますが、楽譜をみてもらうより、言葉の感覚で覚える方が叩きやすく、飲み込みも早いですね。

——コロナ禍で教室や練習自体、難しい時期もあったようですが。

上野：出演の順番がないと練習に身が入らなくて休みがちになったり、子どもが中学校に上がるタイミングで抜けてしまうと、一緒に叩いていた母親も辞めてしまったり、常にメンバーを募集しています。演奏の場が再開すれば、また仲間が増えてくれると期待します。

——「太鼓のリズムは土着のものがあるから大丈夫。それに気分爽快ですよ」と勧められ、太鼓を叩かせていただきました。腕を振り上げるので、肩こりがなくなったりという人もいます。太鼓の魅力と楽しさを伝え、まちのPR活動とともに演奏活動を行っています。

インタビュー：中村 元美



津の太鼓チームの演奏会に出演※



昨年の南勢中学校の運動会にて※



上野さんの手書きの楽譜



座って叩くには腹筋が必要



毎週木曜の夜に練習がある

※印の写真は取材先から提供していただきました